

2列王記6-7章 「信仰による目」

1A 人を大事にする預言者 6

1B 弟子の苦境 1-7

2B 盲目にする裁き 8-23

3B 懲らしめの徴 24-33

2A 思いもよらない恵み 7

1B 信仰の一步 1-8

2B 良い知らせ 9-15

3B 不信仰の対価 16-20

本文

列王記第二 6 章を開いてください。私たちは続けて、エリシャの預言活動を見ていきます。

1A 人を大事にする預言者 6

1B 弟子の苦境 1-7

6:1 預言者のともがらがエリシャに、「ご覧のとおり、私たちがあなたといっしょに住んでいるこの場所は狭くなりましたので、6:2 ヨルダン川に行きましょう。そこからめいめい一本ずつ材木を切り出して、そこに、私たちの住む所を作りましょう。」と言うと、エリシャは、「行きなさい。」と言った。

再び、預言者のともがら、預言者学校の話になりました。エリシャが、各地に持っている預言者学校で起こった数々の逸話を見ました。一人の預言者が死んで、残された妻子の経済的窮状を、空の器に油を加えることによって助け、また、飢饉が襲って、野生のうりを煮てを食べようと思ったら毒が入っていましたが、麦粉を入れて毒を無くしました。そして、食べるパンが足りなかったけれども、そのパンを増やすという奇蹟も行いました。

このような預言者学校に、その学生が増えている姿をここで認めることができます。住んでいる場所が狭くなったということです。墮落したイスラエルの国で、このようにして少しずつ神の預言者が育成されています。素晴らしいことです、今の暗き世においても、神の御言葉をまっすぐに語る僕たちが育てられていくことは急務と言えるでしょう。

6:3 すると、そのひとりが、「あなたもどうか、思い切ってもべたちといっしょに行ってください。」と言ったので、エリシャは、「では、私も行こう。」と言って、6:4 彼らといっしょに出かけた。彼らは、ヨルダン川に着くと、木を切り倒した。

預言者学校の学生たちが、師匠であるエリシャに親近感を持っていることをここで見るができます。ただ預言について教えるだけの、学校の授業の関係ではなく、自分たちで住む所を作り、

共同生活をしています。そして、エリシャにもそれを見てほしいと願っています。生活感がありますね。

6:5 ひとりが材木を倒しているとき、斧の頭を水の中に落としてしまった。彼は叫んで言った。「ああ、わが主。あれは借り物です。」6:6 神の人は言った。「どこに落としたのか。」彼がその場所を示すと、エリシャは一本の枝を切って、そこに投げ込み、斧の頭を浮かばせた。6:7 彼が、「それを拾い上げなさい。」と言ったので、その人は手を伸ばして、それを取り上げた。

ちょっとした事件が起こりました。ここですばらしいのは、たった一人の小さき学生が困っているところに、国の動きに対して進言するほど大きな働きをしているエリシャが関わっているということです。エリシャの人柄がここで伺えます。彼は決して人間味を失うことはありませんでした。画一化、組織化、効率化というものから程遠い、人と人との関わりを失っていませんでした。

ところで斧の頭が外れてしまうのは、当時よくあったようです。モーセの律法に、こんなのがあります。「たとえば、木を切るため隣人といっしょに森にはいり、木を切るために斧を手にして振り上げたところ、その頭が柄から抜け、それが隣人に当たってその人が死んだ場合、その者はこれらの町の一つにのがれて生きることができる。(申命記 19:5)」だから、ヨルダン川に抜けた斧の頭が飛んでいったのは、仲間に当たらないように気をつけていたからかもしれません。

そして、「あれは借り物です」と叫んでいます。ここに、二つのことを言うことができます。一つは彼が貧乏学生だ、ということです。前回の学びの亡くなった学生もそうですが、彼らは基本的に貧しい人たちでした。預言の訓練を受けていて、その間生活の糧を得ていないのですから、必然的に家計が逼迫していたと言えます。イエス様の弟子たちもそうでしたね。神殿への納入金を集める人がペテロの家に来た時に、それを払えない状態だったので、イエス様がペテロに釣りをさせて、硬貨を魚の口に入れさせました。このように、貧しさの中にあっても決して事欠くことがないというのが、主に仕える者たちの報いであると言えます。

もう一つ、借り物だと叫んだ理由は、借りたものを返却することができない、つまり、主に仕える者が外部の人たちにつまずきを与えてしまう、ということがあります。私たちは、キリスト者として、またキリストの教会として、人につまずきを与えるようなことがあってはいけないと命じられています。「ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。(1コリント 10:32)」

そしてエリシャは、「どこに落としたのか。」と尋ねています。ナアマンのらい病の癒しの時に、彼の用意した贈り物をゲハジが取って帰ってきたとき、エリシャは彼がどこにいたか、彼の心に何があったかを知ることができました。けれども、今は斧がどこに落ちたのか、エリシャにも分かりません。ここから、主の与えられる御霊の賜物は、私たちの内に貯蓄できないことを教えています。一度、会得したものをちょうど免許のようにいつでも行なうことができるものではなく、御霊がご自分

の御心のままに賜物を用いるようにしておられることが分かります。ですから私たちは常に、主を求めなければいけません。主の恵みの中にとどまっていなければいけません。主が与えてくださるその時を掴み取らなければいけません。その中であってこそ、主が御霊を私たちに注いでくださり、賜物を用いることができます。

2B 盲目にする裁き 8-23

6:8 アラムの王がイスラエルと戦っているとき、王は家来たちと相談して言った。「これこれの所に陣を敷こう。」6:9 そのとき、神の人はイスラエルの王のもとに人をやって言った。「あの場所を通らないように注意しなさい。あそこにはアラムが下って来ますから。」6:10 そこで、イスラエルの王は神の人が告げたその場所に人をやった。彼が王に警告すると、王はそこを警戒した。このようなことは一度や二度ではなかった。

話は、アラムとイスラエルとの戦いに戻ります。前回はナアマン将軍が出てきて、略奪した時にイスラエルの娘を得て、彼女を自分の妻のはしめたにしようとしたことを読みましたが、ここでも略奪隊がここにやってきています。けれども、エリシャが前もって襲撃するところを王に伝えていたので、事前に阻むことができました。

6:11 このことで、アラムの王の心は怒りに燃え、家来たちを呼んで言った。「われわれのうち、だれが、イスラエルの王と通じているのか、あなたがたは私に告げないのか。」6:12 すると家来のひとりが言った。「いいえ、王さま。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。」

王は当然のことながらこれは情報漏洩であると見ました。内部者に漏洩しているものがあると憤っています。けれども、家来たちは知っていました。家来のうちに、イスラエルの動向を注視している者がいたのでしょう、エリシャが情報提供者であり、なんと王と妻の寝室の会話までも聞いていることが分かったのです。

6:13 王は言った。「行って、彼がどこにいるかを突き止めなさい。人をやって、彼をつかまえよう。」そのうちに、「今、彼はドタンにいる。」という知らせが王にもたらされた。

ドタンはサマリヤから十数キロ北にある町です。

6:14 そこで王は馬と戦車と大軍とをそこに送った。彼らは夜のうちに来て、その町を包囲した。6:15 神の人の召使が、朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包囲していた。若い者がエリシャに、「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか。」と言った。6:16 すると彼は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」と言った。6:17 そして、エリシャは祈って主に願った。「どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。」主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り

巻いて山に満ちていた。

エリシャには霊の世界を見ることのできる能力、霊的な識別力が与えられていました。コリント第一 12 章には、霊を見分ける力という御霊の賜物が書かれていますが、そのような教会全体のために用いられる賜物があり、また一人一人のキリスト者が霊的に成熟すると、霊的識別力が身につくようになります。パウロがコロサイの教会のために祈りました。「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。(コロサイ 1:9)」

6:18 アラムがエリシャに向かって下って来たとき、彼は主に祈って言った。「どうぞ、この民を打って、盲目にしてください。」そこで主はエリシャのことばのとおり、彼らを打って、盲目にされた。6:19 エリシャは彼らに言った。「こちらの道でもない。あちらの町でもない。私について来なさい。あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってやろう。」こうして、彼らをサマリヤへ連れて行った。6:20 彼らがサマリヤに着くと、エリシャは言った。「主よ。この者たちの目を開いて、見えるようにしてください。」主が彼らの目を開かれたので、彼らが見ると、なんと、彼らはサマリヤの真中に来ていた。

午前礼拝において、私たちの霊の目が開かれるようにという祈りについて学びました。実は話しは目が開かれることだけでなく、目を閉ざすという神の働きもあることを教えています。神は、ご自分を恐れる者、ご自分の御心にしたがって歩む者には、ご自分のことを啓示してくださいますが、ご自分に逆らう者に対しては目を閉ざす裁きを行なわれるのです。ここでは、文字通り目を閉ざされましたが、霊的に閉ざすことも神はなさいます。生まれつきの盲人の目を開かれ、そして目の開いた彼がイエス様を神の子として礼拝した時に、そこにいたパリサイ人に対してイエス様はこう言われました。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。(ヨハネ 9:39)」その盲目になるという裁きは、このようなものです。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える。』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」(ヨハネ 9:41)」自分には罪はない、という者は、見えるものが見えなくなっていくということです。信じられることも、信じられなくなっていく、ということです。

6:21 イスラエルの王は彼らを見て、エリシャに言った。「私が打ちましようか。私が打ちましようか。わが父よ。」6:22 エリシャは言った。「打ってはなりません。あなたは自分の剣と弓でとりこにした者を打ち殺しますか。彼らにパンと水をあてがい、飲み食いさせて、彼らの主君のもとに行かせなさい。」6:23 そこで、王は彼らのために盛大なもてなしをして、彼らに飲み食いをさせて後、彼らを帰した。こうして彼らは自分たちの主君のもとに戻って行った。それからはアラムの略奪隊は、二度とイスラエルの地に侵入して来なかった。

これは、ものすごい裁きの方法です。彼らを滅ぼすのではなく、むしろ悪いことをした彼らに向かってかえって良いことを行なうことによって、彼らに神への恐れを植え付けたのです。「レ・ミゼラブル」という小説また映画をご存知の方は、主人公がどうやって回心したかを知っていますね。食べるものを泊まる所を教会の司祭が与えた親切の報いとして、そこにある銀の器を盗んで逃げました。彼は警官に捕まり、教会に引き戻されましたが、司祭はなんと「それは、私があげたものです。銀のろうそく台も持っていきなさい。」と言いました。このように悪を善で報いることによって、主人公は人生が全く更正されて、全うな人生を歩みました。聖書には、「もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。(ローマ 12:20)」とあります。

3B 懲らしめの徴 24-33

6:24 この後、アラムの王ベン・ハダデは全軍を召集し、サマリヤに上って来て、これを包囲した。

略奪するのは止めましたが、ついにベン・ハダデは怒って、全軍を召集し、サマリヤを包囲しました。

6:25 そのころ、サマリヤには、ひどいききんがあった。そのうえ、彼らが包囲していたので、ろばの頭一つが銀八十シケルで売られ、鳩の糞一カブの四分の一が銀五シケルで売られるようになった。

包囲戦によって、町の中での生活必需品の補給が途絶え、町の住民は徐々に息絶えていきます。その上、包囲されていたとき、サマリヤは飢饉で苦しんでいました。そこで食糧の欠乏と、それに伴う過剰なインフレです。ろばはイスラエル人にとって汚れた動物とされており、さらにろばの頭など、食べられる代物ではありません。栄養価は低く、味はまずいでしょう。それが銀 80 シケル、だいたい5千円で売られていました。そして、普通ならただ同然の鳩の糞が 300 ミリリットルぐらいのものが、数百円で売られていたわけです。

6:26 イスラエルの王が城壁の上を通りかかると、ひとりの女が彼に叫んで言った。「王さま。お救いください。」6:27 王は言った。「主があなたを救われないのなら、どのようにして、私があなたを救うことができようか。打ち場の物をもってか。それとも、酒ぶねの物をもってか。」6:28 それから王は彼女に尋ねた。「いったい、どうしたというのか。」彼女は答えた。「この女が私に『あなたの子どもをよこしなさい。私たちはきょう、それを食べて、あすは私の子どもを食べましょう。』と言ったのです。6:29 それで、私たちは、私の子どもを煮て、食べました。その翌日、私は彼女に『さあ、あなたの子どもをよこしなさい。私たちはそれを食べましょう。』と言ったのですが、彼女は自分の子どもを隠してしまったのです。」6:30 王はこの女の言うことを聞くと、自分の服を引き裂いた。彼は城壁の上を通っていたので、民が見ると、なんと、王は服の下に荒布を着ていた。6:31 彼は言った。「きょう、シャファテの子エリシャの首が彼の上についていれば、神がこの私を幾重にも罰せられますように。」

とてつもない惨状になっていました。あまりにも飢えていて、母親が自分の身から生まれる赤ん坊を食べているのです。このことに対して、イスラエルの王ヨラムは、激しい嘆きと悲しみを持っていました。荒布を王服の下にまとっていたのです。けれども彼が、エリシャのせいになっているのは正しいでしょうか？エリシャはイスラエルの王のために、アラムの略奪隊が来る道を教えていました。このように良くしてあげているのに、このような悪いことが起こって、このことをエリシャに対して怒っています。彼は、もしかしたら、アラム軍の目をくらまして、大恥をかかせたことによって、ますます状況が悪くなったことに怒っているのかもしれませんが。あるいは、こんなに悪い状況になっているのに、何ら助けを与えないで無視していると思って、怒っているのかもしれませんが。

けれども、ヨラムは極めて人間的、肉적인見方をしています。なぜ飢饉が起こっているのか、モーセの律法を読めば歴然としているからです。「あなたは、包圍と、敵がもたらす窮乏とのために、あなたの身から生まれた者、あなたの神、主が与えてくださった息子や娘の肉を食べるようになる。(申命 28:53)」この理由は 15 節、「もし、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、私が、きょう、命じる主のすべての命令とおきてとを守り行なわないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたはのろわれる。」とあります。彼らが神に背いていたので、その呪いとして赤ん坊の肉を食べていたのです。

私たちは、常に主の前にへりくだっていなければいけません。何か悪いことが起こっている時に、それがもしかしたら、神の御心を行っているので悪魔が反対しているのかもしれませんが。あるいは、その悪いことは実は神が、私たちに訓練を与え、懲らしめるために与えているのかもしれませんが。ですから、主の前に静まって、主の御心を熱心に求めて、必要ならば悔い改める時間を持つ必要があります。ところが、そうしないでヨラムのように神のせいにし、また他人のせいにして怒ることがあるのです。

6:32 エリシャは自分の家にすわっており、長老たちも彼といっしょにすわっていた。王はひとりの者を自分のもとから遣わした。しかし、その使者がエリシャのところに着く前に、エリシャは長老たちに言った。「あの人殺しが、私の首をはねに人を遣わしたのをご存じですか。気をつけなさい。使者が来たら、戸をしめ、戸を押してもはいれないようにしなさい。そのうしろに、彼の主君の足音がするではありませんか。」6:33 彼がまだ彼らと話しているうちに、使者が彼のところに下って来て言った。「見よ。これは、主からのわざわいだ。これ以上、何を私は主に期待しなければならないのか。」

エリシャは長老たちと話していました。靈的な教えや訓戒をしていたのでしょうか。そこに王の侍従がどかどか入ってきました。あまりにも早かったので戸を閉めることができませんでした。そして彼の言葉は、「何を私は主に期待しなければならないのか。」であります。私たちはこのように、主に対して苦みさえ持つことがあります。ずっと悪いことが起こっても、それでも主は聖い方であり、正しいという前提に立っている人は、たとえすべて、また立ち直ることができます。「まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。しかし、私自身は、この足がたわみそう

で、私の歩みは、すべるばかりだった。(詩篇 73:1-2)」この詩篇の著者は、聖なる所に入って、再び主に立ち返ることができました。けれども、その前提さえ捨てれば、主を試すことになってしまいます。

2A 思いもよらない恵み 7

そして次に驚くべき神の恵みの業があります。

1B 信仰の一步 1-8

7:1 エリシャは言った。「主のことばを聞きなさい。主はこう仰せられる。『あすの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。』」
7:2 しかし、侍従で、王がその腕に寄りかかっていた者が、神の人に答えて言った。「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。」そこで、彼は言った。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」

エリシャは、明確に、これが主の言葉であり、明日の今ごろに起こると、神のことばをはっきりと告げています。それが、7.6 リットルの上質の小麦粉が数十円で、大麦も 15 リットル程度のものが同じく数十円で売られます。神の驚くべき恵みと救いの業によって、イスラエルに対してご自分が神であることを主が示そうとされています。

ところが、王の侍従はこう言います。「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。」主が天に窓を作って、小麦と大麦を降らせてもそんなことは起こらない、と言っています。不信仰の罪を犯しています。不信仰の対価は何かと言いますと、エリシャが言った通りです。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」極めて大事な言葉です。不信仰になることによって、そのことが実現しなくなるということでは決してないのです。私たちすべてが信じなくとも、神はご自分の願われていることをことごとく行うことができるし、また実際に行なわれます。ですから、私たちが不信仰になって神が害を受けることもなく、損をすることもありません。誰が損をするかと言いますと、私たちなのです。実現するのですが、それを楽しむことができないという対価を支払うことになります。

7:3 さて、町の門の入口に四人のらい病人がいた。彼らは互いに言った。「私たちはどうして死ぬまでここにすわっていなければならないのだろうか。7:4 たとい、私たちが町にはいろうと言っても、町はききんなので、私たちはそこで死ななければならない。ここにすわっていても死んでしまう。さあ今、アラムの陣営には入り込もう。もし彼らが私たちを生かしておいてくれるなら、私たちは生きのびられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。」

ここから、覚えておくべき非常に大切な、神の恵みの御業を見ます。ここの箇所は、数多くの主の奉仕者が新しい働きの中に信仰によって入っていく時に、主が語ってくださる箇所として有名です。実は私も、ここの箇所を読んで、2005 年に海外宣教に行くことを促され、また 2010 年に日本

に戻って教会を始めることも促されました。

エリシャが言った言葉がどのように実現するのか、であります。私たちの頭では決して思いつかない方法で神が実現されます。しかもそれは、あまりにもふさわしくない人を用いられて実現されます。神は、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。(1コリント 2:9)」と言われました。そして、「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。(1コリント 1:27)」と言われました。神の恵みによる驚くべき業、私たちの思いをはるかに超えて事を成し遂げる神の御心であります。

四人のらい病人がいます。このらい病人が、サマリヤの町をアラムの手から救い出すのに用いられるのです。ナアマン將軍の時に説明しましたが、らい病人はモーセの律法で、汚れた者とみなされています(レビ記 13-14 章に書いてあります)。彼らはイスラエルの宿営の外にいななければならない、人が近づけば「汚れている、汚れている」と叫ばなければいけません。この彼らが用いられるのです。

さらに、「四人」というのも興味深い数字です。神の好意を受けるのに相応しくない者が、受けた時に四人が他の聖書の箇所に出てきます。「そのとき、ひとりの中風の人が四人の人にかつがれて、みもとに連れて来られた。(マルコ 2:3)」イエス様はこの中風の者に、罪の赦しを宣言し、また床から立ち上がるようにされました。さらに、使徒ペテロは幻を見ました。「見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。(使徒 10:11-12)」これは異邦人に救いを与えることを示す幻であり、この後にローマの百人隊長コルネリオが救いを受けます。どちらも、神の好意を受けるに値しない者たちに神が与えられる好意の記録であり、これが神の恵みなのです。

彼らは城壁の外にいて暮らしていました。町から出てくるゴミを漁って生き延びていました。ところが、食糧が枯渇しているので、ゴミさえも出てきません。だから、失うものがなくなったのです。こう言いました。「たとい、私たちが町にはいろうと言っても、町はききんなので、私たちはそこで死ななければならない。ここにすわっていても死んでしまう。さあ今、アラムの陣営には入り込もう。もし彼らが私たちを生かしておいてくれるなら、私たちは生きのびられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。」確かに一歩前進したら、殺される可能性が大である。けれども現状維持を保てば、確実に自分たちは死んでしまう。だから、可能性がゼロではないほうに賭けてみようということでもあります。

ここに大きな霊的原則があります。ぜひ実践してください。「信仰の一步を踏み出す」ということです。これには二つの段階があります。一つは、「今の状態では確実に、霊的に死んでしまう」という

切迫感です。黙示録の七つの教会の一つ、サルデスにある教会に対してイエス様は、「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。(黙示 3:1)」と言われました。自分の信仰生活、教会生活はそのまま続けても大きな問題は、表向きは起こっていないかもしれませんが。けれども、実は今の安定した生活、自分が快適だと思うところに留まっているだけであり、ここままだと神が生きておられることのリアリティー、その現実が見えなくなっていくという危機感であります。神はこのようなことが起こらないように、自分にとって不便や不都合なことが起こるのをお許しになることがあります。いつまでも同じところにおいて、その生ぬるさの中で死なないように、時に熱くしてみたり、または冷たくしてみたりなさるのです。

そして先が見えないことであっても、一歩先に踏み出してみるのです。見た目は、到底、成功しようにありません。人間の目では、成功しないでしょう。けれども、そのわずかな可能性があるのであれば、それを信仰によって掴み取り、出て行くのです。いかがでしょうか？皆さんが、その生きた証しです。私たちと皆さんがどのようにして会ったでしょうか？私たちが予め、皆さんに会う計画があったから、日本に戻ってきたのでしょうか？私には、昔、何年間もたった一人、二人、あるいは誰もいない所で御言葉を語っていた経験があります。こちらのほうが私にとっては現実だったのです。これが信仰の一歩であります。

7:5 こうして、彼らはアラムの陣営に行こうと、夕暮れになって立ち上がり、アラムの陣営の端まで来た。見ると、なんと、そこにはだれもいなかった。7:6 主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせられたので、彼らは口々に、「あれ。イスラエルの王が、ヘテ人の王たち、エジプトの王たちを雇って、われわれを襲うのだ。」と言って、7:7 夕暮れになると、彼らは立って逃げ、彼らの天幕や馬やろば、すなわち、陣営をそのまま置き去りにして、いのちからがら逃げ去ったのであった。

らい病人が思い切ってアラムの陣営に行ったら、物家の空でした。しかも、その陣営には、食べ物もそのままの形で残ったままでした。まるで夢の中にいるような超現実的な光景です。その経緯を説明していますが、らい病人四人が歩いて行った時に、はあはあ言っている声が、なんと戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎとして彼らに聞こえたのです。ここに主が介在しておられました。それで、傭兵を雇ったのではないかと思ひ込み、命からがら逃げ去りました。

さて、ここでらい病人が行なったことって、何でしょうか？思い切って、アラム人の陣営に歩いて行ったことだけです。彼らが自分の声を大軍勢に変えませんでした。アラムに恐れを与えませんでした。すべて主が行なわれたことです。これが信仰による神の恵みの働きです。信仰にはもちろん行ないが伴います。彼らは信仰によって歩き出したのです。けれども、救いはもっぱら神に拠るものなのです。この信仰と神の働きの関係をしっかりと握りしめてください。体験してください。このことによって、信仰によって救われたのみならず、信仰によって救いを完成することができます。

7:8 このらい病人たちは、陣営の端に来て、一つの天幕にはいり、食べたり飲んだりして、そこか

ら、銀や金や衣服を持ち出し、それを隠しに行った。また、戻って来ては、ほかの天幕にはいり、そこから持ち出し、それを隠しに行った。

信仰によって一歩踏み出すと、このように神の豊かさと良きものでいっぱいになります。預言者のともがらが、神が増やしてくださったパンをいっぱい食べて、余りが出たように、神は私たちを良きものでいっぱいにし、溢れ出させてくださいます。ところが、これだけで終わらないのです。

2B 良い知らせ 9-15

7:9 彼らは話し合って言った。「私たちのしていることは正しくない。きょうは、良い知らせの日なのに、私たちはためらっている。もし明け方まで待っていたら、私たちは罰を受けるだろう。さあ、行って、王の家に知らせよう。」7:10 彼らは町に行って、門衛を呼び、彼らに告げて言った。「私たちがアラムの陣営にはいってみると、もう、そこにはだれもおらず、人の声もありませんでした。ただ、馬やろばがつながれたままで、天幕もそっくりそのままでした。」

彼らは、今、自分たちだけでこれを楽しんでいるのは良くないことであり、自分たちだけにしていれば災いが来ると思いました。良い知らせをサマリヤの住民にももたらして、彼らも飢えから解放されなければいけないと思いました。それで門衛に伝えに言ったのです。

これが、私たちが、主の良きものを受け入れた後にしなければいけないことです。自分たちの中に抑えてはいけないのです。自分にあるものを、しっかりと分かち合っていかなければならないのです。そして、これが実は、「福音宣教に召されている」という言葉そのものであります。パウロが言いました。「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかつたら、私はわざわざに会います。(1コリント 9:16)」この強い促しが、神の呼びかけ、また召しであります。

7:11 そこで門衛たちは叫んで、門のうちの王の家に告げた。7:12 王は夜中に起きて家来たちに言った。「アラムが私たちに対して計ったことをあなたがたに教えよう。彼らは私たちが飢えているのを知っているので、陣営から出て行って野に隠れ、あいつらが町から出て来たら、生けどりにし、それから町に押し入ろう、と考えているのだ。」7:13 すると、家来のひとりが答えて言った。「それでは、だれかにこの町に残っている馬の中から五頭だけ取らせ、その者たちを遣わして偵察してみましよう。どうせ彼らはこの町に残っているイスラエルの全民衆と同じめに会い、または、すでに滅ぼされたイスラエルの全民衆と同じめに会うのですから。」7:14 彼らが二台分の戦車の馬を取ると、王は、「行って、偵察して来なさい。」と命じ、アラムの陣営のあとを追わせた。7:15 彼らはアラムのあとを追って、ヨルダン川まで行った。ところが、なんと、道は至る所、アラムがあわてて逃げるとき捨てていった衣服や武具でいっぱいであった。使者たちは帰って来て、このことを王に報告した。

にわかに信じることのできない王と家来たちがいますが、彼らもらい病人と同じように、どうせ死

んでしまう身であるからといって、偵察だけをさせました。サマリヤからそのまま東に下っていき、ヨルダン川まで行って、そこからダマスコのほうに行くわけですが、ヨルダン川までの道に衣服や武具がいっぱいありました。

3B 不信仰の対価 16-20

7:16 そこで、民は出て行き、アラムの陣営をかすめ奪ったので、主のことばのとおり、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られた。7:17 王は例の侍従、その腕に王が寄りかかっていた侍従を門の管理に当たさせたが、民が門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。王が神の人のところへ下って行ったとき話した神の人のことばのとおりであった。7:18 神の人が王に、「あすの今ごろ、サマリヤの門で、大麦二セアが一シェケルで、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる。」と言ったとき、7:19 侍従は神の人に答えて、「たとい、主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。」と言った。そこで、彼は、「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」と言った。7:20 そのとおりのことが彼に実現した。民が門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。

ここで、エリシャの預言の実現を確認しています。どうして小麦や大麦がそんなに安く売られるのかと言えば、アラムが包囲のために自分たちの食べるための大量の小麦と大麦を用意していたからです。需要と供給のバランスによって市場の価格が決まりますから、それだけ安くなりました。そして侍従が、自分の目で見て、それを食べることはできないと言ったのは、その食べ物が売られていても、あまりにも人込みで、ちょうど満員のサッカー場などで時々起る、何人かが押しつぶされて死んでしまった、というようなことが起こったのでしょう。踏みつけられて、この言葉が実現しました。

ここから私たちが得るべき教訓は何でしょうか？詩篇に、「**主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。(34:8)**」とあります。味わうのです。ただ見ているだけ、あるいは触れているだけではなく、味わうのです。言い換えれば、主に身を避ける、あるいは信賴する、ということになります。私たちの祈り不足で、見失っている神の御業があるかもしれません。自分はまだ生きていると思っていて、実は靈的に眠ってしまったのかもしれません。サルデスにある教会には、「あなたの行ないは全うされていない」とあります。自分で勝手に、ここまで自分は靈的に前進したのだから、満足していると言っているかもしれません。そうすれば、私たちの霊の命は死んでしまいます。ちょうど水から出された魚のように、徐々に命が取られていきます。その前に、信仰の一步を踏み出してください。神が大いなる恵みをもって臨んでくださいます。